

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（設問の都合で、一部表記を改めた箇所があります。）

人は人間関係を失わないために、また人間関係を新しく築いていくために、意図的に社会とかかわっていかなければ、あるいは社会とかかわるために人間関係を作っていかなければ、孤独はしのび足でやってくる。人は個人として不可侵の自分だけの世界を持つと同時に、他方では、人とつながる社会的な世界に生きる。この二つの世界を表裏一体のものとして持っているかないと **Aジユウ** **ソク** 感のある人生を送ることができない。今は労働の形態も個人単位の非正規が多くなっていくから、一人にはなりやすい時代かもしれないが、社会人にはなりにくい時代なのだ。しかし、個人として生きるだけでは物足りなく不安で、多くの人はどうしていかわからないでいる。 **X** は健康を **むしば** しみ、寿命を縮めるという。

① **社会人**とはいつたい何だろうか。社会人として応答される人間であるためには、どうしたらいいのだろうか。

私自身を振り返ってみると、社会を意識したのは小学校を終わるころから中学に進学するころではなかったかと思う。日本が戦争に突入していった時代である。

思いだすのは、中学生のコペル君が登場する吉野源三郎『君たちはどう生きるか』（岩波文庫）という本のことだ。この本は岩波書店の出版物の中でも、今もって絶えることのない人気を **Bイジ** しているという。

コペル君とは彼のおじさんが命名したあだ名で、主人公の本田純一君がコペルニクスの発見をしたことから名づけられた。

② **コペル君の新発見**とは一体何だったのだろうか。

ある日コペル君はビルの屋上から、周囲を見ているうちに、路上を行き来する人や、周りのビルの窓の中において、コペル君を見ているかもしれない多くの人の中の一人が、自分であるという不思議な感覚にとらわれる。

コペルニクスは周知のように一五四三年五月二三日、革命的出版といわれる「天球回転論」によって、天動説から地動説へと、当時の社会的常識を **C覆** した天文学者である。人びとは当時、地球を中心として太陽や星が地球の周りを回っていると、目でみたままを信じていたし、自分が立っている大地が動いていると想像することさえできなかった。キリスト教の教会も地球が宇宙の中心であると教えていた。

人間というものはいつでも自分を中心としてもものを見たり考えたりする性質を持っているため、子どものうちは、どんな人でも、地動説ではなく **③天動説** のような考え方をしている。それが大人になると、多かれ少なかれ地動説のような考えになつてくる。広い世間というものが考えの初めにまずあって、その上でいろいろなことや、人を理解していく。しかし自分に都合のいいことだけを見ようとする自分中心の考え方は、世の中とか人生とかを考える時もやっぱり、ついて回っているのだ。

自分たちの地球が宇宙の中心だという考えにかじりついていた間、人間には宇宙の本当のことがわからなかった。それと同様に、自分ばかりを中心にして、物事を判断していくと世の中の本当のことを、ついに知ることができないでしまう。

「人間て、ほんとに分子みたいなものだね。」……君の感じたとおり、一人一人の人間はみんな、広いこの世の中の一分子なのだ。みんなが集まって世の中を作っているのだし、みんな世の中の波に動かされて生きているんだ。……広い世の中の一分子として自分を見たということは、決して小さな発見ではない。……」

これがおじさんのコペル君命名の理由である。

この文章を読んだ時の感動を私は今もはっきり覚えている。それはちょうどコペル君と同じ年頃だった私が、同じように社会の存在を感じ始めていたからだろう。

コペル君は、やがて、分子のような存在であるそれぞれの人間が、ただ、ばらばらの分子として生きているのではなく、目に見えない多くの人とつながり合って、この社会が成り立っていることに気がつく。日常で使っているどんな品物も誰かによって作られ、誰かによって運ばれてきたもので、その品物の **D背後** には目に見えない何百何千人の人が働きつながり合っているという事実があることを発見する。コペル君はそれを「人間分子の関係、網目の使用」と名づける。

a コペル君が社会人としての目覚めを獲得していく**Eカテイ**には、自分が多くの人の中の一分子だと感じるだけでなく、もう一つ、大事な経験を経なければならなかった。

それは人ととの、あるいは社会的な出来事と自分との関係に気づく人間らしい想像力を持てるかどうかということである。人と人、物と物との関係をどこまでもたどっていくことの大切さをコペル君に教えてくれたのは、やはり、おじさんだった。

数学、光学、物理学の天才といわれたアイザック・ニュートンは、一六六〇年代にイギリスのケンブリッジ大学で学んでいたころ、木から落ちるリンゴを見て、万有引力のインスピレーションを得たといわれている。その逸話の**F真偽**は明らかではないが、おじさんはコペル君に、「ニュートンがなぜ木から落ちるリンゴと万有引力を結び付けることができたと思う?」と質問した。

その時、おじさんは次のような想像をして見せたのだ。リンゴが木の枝から落ちた時、ニュートンは木の枝をもう少し上にもう少し上に、とどこまでも上げていくと、ある地点からは物体が落ちてこなくなる。そこから、リンゴが木の枝から落ちてくることと、月が地球の周りをまわっていることには同じ原理が働いているのではないかとニュートンは考えた、という推理である。

コペル君はその推理に触発され興奮して、ニュートンがリンゴを、もっと上へもっと上へ上げていったのと同じように、分子である自分の身の回りの人間と人間の間を、さらに広く深くたどってみる。そして、**④社会という真実**にたどり着いたのだった。

コペル君は粉ミルクがどこから来るか、どのようにして来るか、誰が作っているか、乳牛はどこで飼われているか、と次々にたどってみる。**b** すべての人びとは網目のようにつながって社会の関係の中で生きていることを発見したのだった。

コペル君の眼前には、人びとが網の目のようにつながったいろいろな社会が立ち現われる。クラスメートの数人から馬鹿にされ、からかわれる豆腐屋の浦川君をかばって立ち向かう友人、ガッテンへの尊敬。コペル君は浦川君と親友になり、貧しい家が軒を並べる下町の浦川豆腐店を訪ねる。そこで中学生なのに、豆腐づくりの職人として一人前の腕を持つ浦川君を見て驚き、浦川君よりも、もっと貧しい家に育ったに違いない住みこみの若い衆に、浦川君がどんなに優しくしているかに心を打たれる。

社会に目覚めることは関係に目覚めることであり、関係に目覚めることは新しい自分に目覚めることなのである。関係をたどっていく、という思考作業は、人間に特有なものではないか。なぜなら人間には直接には体験しない社会を認識し、歴史や未来を含めた社会を想像する力が備わっているからだ。いいかえれば大人になっていくことは社会人になっていくことなのだ。

c 災害や病気や貧困の問題に対して、「自分は関係ない」と思ってしまいか、あるいは同じ人間として、他人の悲しみや喜びを想像し共感する感受性を持っているか。そしてどんな形であれ、そのことに手を差し伸べようとするかどうか。それは社会人になれるかどうかの分かれ目であるような気がする。

Y ことは、ある意味では重荷を分かつことでもあるので、自己防衛本能から、「関係ない」と思ってしまいたい誘惑を誰もが感じるのかもしれない。しかし、関係を深くたどっていくことは、物ごとの真理に迫っていくことでもあるのだ。

(暉峻淑子『社会人の生き方』より)

問一 — **A**、**F**について、漢字は読み方をひらがなで答え、カタカナは漢字に直し、楷書で書きなさい。

問二 **X**に入る語として適切な語を**X**の前の文章より漢字二字で抜き出さない。

問三 — **①**「社会人とはいったい何だろうか」とありますが、社会人として必要な力はどのようなものだと筆者は述べていますか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 多様性 イ 独創性 ウ 感受性 エ 柔軟性 オ 客観性

問四 — **②**「コペル君の新発見」とは、具体的にどういうことですか。本文中の語を用いて、答えなさい。

問五 ―― ③ 「天動説のような考え方」について説明した左記の文の **I** ・ **II** に入る適切な言葉を本文中の語を用いて制限字数内で答えなさい。

「天動説のような考え方」とは、 **I (五字以上十字以内)** 考え方であり、そのような考え方をしていると、 **II (十五字以上二十字以内)** ことになる。

問六 **a** **c** に入る語として最も適切な語を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア そして イ たとえば ウ しかし エ しかも オ つまり

問七 ―― ④ 「社会という真実にたどり着いた」とありますが、どのような気づきがあったのかを説明した左記の文の **□** に入る適切な言葉を本文中の言葉を用いて二十字以内で答えなさい。

社会の中で人間は **□** ことに気づいた。

問八 **Y** に入る言葉を文中より七字で抜き出して答えなさい。

問九 次のア～オのうち、文中で述べている内容として正しいものには○、間違っているものには×で答えなさい。

ア 社会人になるということは他者に起こっている事象に対し、自分とは無関係だと思おうのではなく、相手の喜怒哀楽を感じる心を持ち、行動することが重要である。

イ 社会の中で関係をたどることができるのは人間の持つ特別な思考であり、人間は間接的に体験する社会をも認識したり、想像することができる力を有している。

ウ コペル君は小さい頃に自分中心の考え方であることに疑問を抱き、世の中のすべては分子として存在するのだからその分子が集まってこそ世の中が動くのだと気づいた。

エ 分子である自分たちが網の目のように社会に存在していることに気づいたコペル君におじさんはニュートンの話を例に挙げ、上を目指して人間関係を構築していく大切さを説いた。

オ コペル君と同年代だった頃の筆者は常に自分に都合の良い考え方をしていたが、コペルニクスの話に感動し、コペル君のように社会について考えるようになった。

③ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(設問の都合で、一部表記を改めた箇所があります。)

中学二年生で美術部に所属している白岡六花は、あることをきっかけに、小学生の頃からの友人で、陸上部に所属している春山早緑と互いのことを避けるようになってしまっている。次の文章は、そのきっかけとなった出来事を振り返る場面から始まっている。

去年の二学期。十月の半ばのことだ。

それまで、私と早緑は、まだいっしょにいた。クラスはちがったけれど、私は早緑の部活が終わるのを待って、いっしょに帰った。

きっかけは、部活のぐち——ほんとうに、ささいなこと。

いやなことがあつて。それを友だちに聞いてもらつて。そうして、なんとなくすっきりする。そんなの、だれだつてしていること。とくにめずらしくもない、ふつうのこと。

なにも特別じゃない。日常のひとコマ。

※上枝先生には言えなかったほんとうの気持ち。ずっとがまんして、のみこんで、黒々とした澱おりのようにたまっていた感情。私はそれを、早緑に聞いてほしかつた。

あの子なら、いっしょにおこつてくれると、そう思ったから。

「……どうしてみんな、ちゃんと絵を描かないんだろう」

私は美術部でのことを話して、最後にこう言った。

「ばかみたい。まじめにやらないなら、やめたらいいのに」

それ、ほんとひどい——そう言ってくれると思つた。

六花は悪くないつて。なにもまちがつてないつて。

なぐさめてくれるつて、励ましてくれるつて、信じていた。

だけど、そうじゃなかつた。早緑はいやそうな顔で、吐きすてるみたいに言った。

そんなの、しょうがないよつて。

「だつて、六花みたいに、才能がある子ばかりじゃないでしょ？」

「だれだつてさあ、どうしても勝てない人を見たら、やる気もなくなっちゃうよ」

そう言つて、早緑は美術部の子たちのX✕を持つた。私の味方じゃなくて、あの子たちの味方をした。あの子たちがまじめにやつていないのは、私のせいみたいなの、そんな言い方をして、私のことを責めた。

① ショックだつた。それから、怒りがわいてきた。

でも、何度説明しても、早緑はわかつてくれなくて。

それどころか、どんどんふきげんになつていつて。

「いいよね、白岡Aガハクは」

最後に、早緑は言つた。

「好きなことがちゃんとあつて。得意なことがちゃんとあつて。幸せじゃん、それ」

早緑のその言葉で、そのときの表情で。

私にはわかつた。わかりたくなかつたけれど。

私たちは、おたがいにY✕んだつてことが、わかつてしまった。

帰り道のとちゅう、私はコンビニの向かいにある公園に立ちよつた。

通学路にあるこの公園には、小学校のころからよく来る。まへは、あの子もいっしょに。いっしょじゃなくなった今でも、ときどき。すみっこにあるベンチに腰かけて、遊んでいる子たちをぼんやり見て、気が向けばスケッチもする。

すべり台で遊んでいるちいさな子。そのむこうの広場で、キャッチボールをしている小学生たち。

② スケッチブックを広げて、でも、鉛筆をにぎる手に力が入らなかつた。

「……好きで、絵を描いているだけ」

ひとり、ちいさくつぶやく。

それだけなのに、どうして責められないといけないのだろう。

私は絵を描くのが好きで、得意で、それは才能とか、努力とか、いろいろな言葉で表されるかもしれないけど、少なくとも

かしらの価値があるもので、あの子が言うように、幸せなことにはちがいない。

だけど、絵を描くのがいくら幸せだって、いつも楽しいわけじゃない。苦しいときだってある。さびしいときだってある。そんな気持ちを分かちあいたいと思うのは、欲張りなのかな。好きなことがあるっていうだけで、満足しないといけないのかな。それ以上のことを望んではいけないのかな……。

いつのまにか、公園から子どもたちはいなくなっていた。

私はベンチの上でひざを抱いた。目をつぶって、ちいさく息を吐く。

そもそも、どうして絵を描くのが幸せだって、思ったんだっけ。

私はどうして、絵を描いているんだっけ……。

——え、なんでこんなじょうずに描けるの？ガハクじゃん！

B 脳裏に響く※あの日の声。そっと、眼鏡のつるに手をふれる。

そのとき、私はようやく、自分の気持ちに気づいた。

「見つけ！って、あれ……？」

そんな声がして、私は顔をあげた。心臓が止まるかと思った。

「おかしいなあ。いたと思ったんだけど」

そう言いながら、すべり台の下をのぞきこむポニーテール。

思わず、声もれた。

「早緑……？」

結わえた髪がなびく。ふり返った早緑の目が、びっくりしたように大きくなる。

「六花」

沈黙があった。

早緑は気まずそうだった。そうだろうな、と私は思う。私だって気まずい。だけど、いつまでもだまっているわけにはいかない。おずおずと、こんなことをたずねた。

「……『見つけ』って、なんのこと？」

「え？あ、うん。そうね。あのー、野良ネコがね、公園にいるって聞いてさ」

ごまかすように笑う早緑。私はうなずいた。

正直ちよつとおもしろかった。でも、どんな顔をしていいかわからない。

「だれに聞いたの？」

「くろ……いや、いいじゃん。そのことは」

早緑、照れているみたい。私はくすんと笑った。

「六花は、どうしたの？またスケッチしてたの？」

「……しようと思ったけど、気分が乗らなくて」

私の言葉に、早緑は眉間にきゅつとしわをよせる。それから、すたすたと歩いてきて、となりにすわった。カバンをベンチに置いて、足をばたばたさせる。

「なんか、ひさしぶりだね」

毒にも薬にもならないような私の言葉を無視して、早緑は言った。

「六花、やっぱりまだ、部室で絵を描かないんだね」

私はだまっていた。なんて言ったらいいか、ひとつも思いつかなかった。

③ しばらくして、早緑は口を開いた。

「あのね、六花。あたしき、ずっと言いたかったことがあって」

その真剣な声に、覚悟を決めたような表情に、さっと心が冷えるのを感じた。無意識に体がぎゅつと縮こまって、ようするに私はこわがっているらしい。

わかったからだ。早緑が、あの日の続きを話そうとしているって。

逃げだそうかと、一瞬思った。

このまま立ちあがって、ふり返らずに立ち去ってしまおうか、と。

……。

※——じゃ、なかなかおりのチャンスが来たら、逃すんじゃないぞ。
「……………なに？」しぼりだした声はかすれていた。早緑はうなずく。
「あの、こんなこと今言ってもしょうがないのかもしれない。六花のこと、こまらせたらごめん。でも、言わなきゃって、ずっとずっと、そう思ってた」

何重にも予防線を張るように前置きしてから、早緑はためらいがちに言った。

「あたしき……ほんとのこと言うと、毎日泣いてたんだ。あのころ」
泣いてた？

「……………私とけんかしてから、ってこと？」

早緑は首を横にふった。

「ううん、ちがうちがう。そうじゃなくて、そのまえから」

「そっか……………うん」

④ちよつぱり期待して、それからがつかりした自分が、ひどくはずかしい。
って……………え？

「私とけんかする、まえ？」

早緑はうなずく。

「陸上部の練習が、いやでいやで。みんな、あたしよりずっと足が速くてさ。練習もきつくて、ぜんぜんついていけなかった。先輩こわいし。しょっちゅうおこられてたし。ほんと、毎日毎日、つらくてしょうがなくて。家でめそめそ泣いてたの」

私はとなりを見た。なつかしい、早緑の横顔。遠くを見つめる黒い**C**。

⑤でも、六花には言えなかった。そんなこと、ぜったい言えなかった。はずかしかったから。一生懸命、絵を描いて、努力を樂しむことができる六花に、そんなこと、言えなかった。まぶしかったよ。あたしは六花のことが、ずっとまぶしかった……………だからさ、あの日。あたし、責められてるような、そんな気がしちゃったんだよ」

——ばかみたい。まじめにやらないなら、やめたらいいのに。

あの日、自分が放った言葉が、どこか遠くで響いた。

早緑はちいさく笑った。ぽつぽつ、抱えていた気持ちをこぼすように、言葉をつむぐ。

「あたしもさ、**D**イジになっちゃって。あたしのことじゃないのに。六花がきずついていたの、わかっていたのに。でも、あたしもさ、あのとき、ほんとにつらかった。大好きだった友だちに、自分のことを否定されているような、気持ちがしてき。だから、あんなこと言っちゃった。六花に、ひどい言い方、しちゃった。ほんとうに……………」

そう言っ、おずおずとこちらを見た早緑の顔が、固まる。

「六花？」

「……………ごめん」

「え、いや、ごめんごめん。あの、なに？泣かないで。ちよつと……………あ、ハンカチ」

あわあわとポケットをさぐる早緑。私はふるえていた。

景色がにじんで、ぼろぼろとこぼれて、息をするのもつらかった。

なにが、「わかりあえない」だ。

わかるうとしなかったのは、私のほうだった。

自分のことではいいっぱいで、**⑥**早緑の気持ち、考えたこともなかった。

さんざん被害者のような顔をしてたくせに、ほんとうに悪いのは私だった。

私、早緑のこと、きずつけてたんだ。

(村上雅郁『きみの話を聞かせてくれよ』より)

※ 上枝先生……………美術部の顧問の先生。

あの日……………六花と早緑が初めて会った日。

——じゃ、なかなかおりのチャンスが……………以前、クラスメイトの「黒野くん」に言われた言葉。

問一 — AとDについて、漢字は読み方をひらがなで答え、カタカナは漢字に直し、楷書で書きなさい。

問二 — Xに入る、体の部位を表す語を漢字一字で答えなさい。

問三 — ①「ショックだった」とありますが、なぜ「ショック」を受けているのか説明した左記の文の I に入る言葉を、それぞれ十字以内で考えて答えなさい。

早緑なら I と思ったのに、それどころか II たことに対し、 III ように感じ、ショックを受けている。

問四 — Y にあてはまる言葉を、本文中から十字以内で抜き出して答えなさい。

問五 — ②「スケッチブックを広げて、でも、鉛筆をにぎる手に力が入らなかった」とありますが、この時の心情として最も適切なものを、次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 絵を嫌いになった時期を自分なりに乗り越えて今の自分があるのに、簡単に「好きなことがあって幸せじゃん」と言われたことが腹立たしく、スケッチブックを開いたものの絵に身が入らない。
- イ 公園で思い思いに遊んでいる子供たちの様子は見ているだけで面白いので、描かなければと思うのについつい子供たちの方に注目してしまい、スケッチブックを開いたものの絵に身が入らない。
- ウ 早緑と仲違いしてしまっている状況を変えたいと思いつつも、あまりにも自分とは価値観が違う早緑と話すことを想像するだけで気が重く、スケッチブックを開いたものの絵に身が入らない。
- エ 絵を描くことがこれまでは幸せだと感じていたが、早緑に責められるような言い方をされたことで、今は嫌いになりそうであることに気付き、スケッチブックを開いたものの絵に身が入らない。
- オ まじめに部活動に取り組んでいた自分には何の落ち度もないはずなのに、早緑に責められたのは納得がいかないという思いが頭から離れず、スケッチブックを開いたものの絵に身が入らない。

問六 — ③「しばらくして、早緑は口を開いた」とありますが、この時の早緑の心情として最も適切なものを、次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分が真剣な様子で話し始めたら、六花は逃げ出してしまうかもしれないということは容易に想像できるが、もしそうなってしまったら、それを引き留めてでも話をしようと覚悟を決めている。
- イ 自分の発言のせいで六花を傷つけてしまったことを謝りたいと思いつつ、タイミングをつかめないまま時間が経ってしまったが、この機会を逃してはいけないと考え、六花に謝ろうと決意している。
- ウ 六花が絵に夢中で、下らない他人の悩みなど寄せ付けないような雰囲気であったために、悩みを相談できず辛かったというのを、言いづらいたとは思いつつながらも伝えようと覚悟を決めている。
- エ 久しぶりに会い、お互い気まずい思いをしている中、六花を怒らせるようなことを言うのは気がひけると思いつつも、自分の言いたいことを言うことが仲直りには必要だと思いつつ直している。
- オ 部室で絵を描かず、周りを遠ざけて自分の好きなことに一心不乱に取り組んでいる今のような態度では、誰も六花に心を開くことなどできないと、勇気を出して忠告しようと決意している。

問七 — ④「ちよっぴり期待して、それからがっかりした自分」とありますが、左記の問いについて説明しなさい。

- (1) 「ちよっぴり期待して」とはどのような期待ですか。
- (2) 「がっかりした」のはなぜですか。

問八 — ⑤「でも、六花には言えなかった」とありますが、「早緑」が「六花には言えなかった」のはどのような思いからですか。本文中の言葉を用いて説明しなさい。

問九 — ⑥「早緑の気持ち」とありますが、どのような気持ちですか。具体的に説明しなさい。